団塊の世代たちに「物語」は可能か

――高野山の「村上春樹」ライブ討論から――

団塊の世代にとって「物語」とはなにか。現代において私たちは社会とつながるどのような原理をもてるのだろうか。作家、村上春樹氏の同世代である若手評論家が集い、村上作品を通して、いまの時代にどうかかわっていけばいいのかを探る「『村上春樹をめぐる冒険』――ライブ・ヴァージョンin高野山」が和歌山県・高野山で開かれた。

（学芸部・池田知隆）

三百万部を超えるベストセラーとなり、社会現象ともいわれた「ノルウェイの森」で知られる村上氏は一九四九年、兵庫県芦屋市の生まれ。「風の歌を聴け」「羊をめぐる冒険」「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」などの作品群は、七〇年前後の激しい学生運動の時代に青春を過ごした団塊の世代の感性を色濃く映し出している。

今の社会を支えるその世代は、七〇年代はじめの連合赤軍事件などを通して「非政治」化し、吉本隆明氏は「生きる目標をどこにおいているのかさっぱりわからない。こういうふうに否定的に見る見方もある」と指摘した（九〇年三月、講演「一九七〇年代の光と影」）。さらに吉本氏は「（この世代は）社会的政治的物語は創らず、その時その時、一日一日をいかに充実させて生きるかを考えるようになった。いま目の前にあるこの社会をよしとする以外に、別の社会を考えることは無駄だ、意味がないと考えていった」と位置づけている。

その七〇年代を象徴する作家として吉本氏があげる村上氏の作品をいまどう読むか。それが、このライブを企画した大阪の古書店主、島元健作さん（四六）たちのテーマだった。

このライブ討論のパネリストは評論家の小浜逸郎、加藤典洋、竹田青嗣の各氏と橋爪大三郎・東工大助教授（社会学）。聴き手は関西のほか北海道、東京など全国から約七十人が参加。その六割は四十歳代で、討論は十二時間に及び、会場からも発言が相次いだ。

「家族論」「エロス論」など生活の領域から社会とのかかわりを探る小浜氏は「戦争体験や反スターリン主義などに思想のエネルギーの源をもつ吉本さんに比べ、私たちは自立の根拠がない。自我がスカスカになったところから始まっているが、村上作品も同様に（現実から離れた）虚構性の中にリアリティがある。私たちはこの世界を受容し、忠実な証人になることを求められているが、その最良の方法はなにかこそ問われねばならない」と語った。

村上作品の主人公たちは、ビールはこういうときにしか飲まない、というように自分の行動を自分で律し、自分にだけ適用できるルール、つまり「格率（マクシム）」をどこかで保っていたいという感じで生きている。加藤氏は「そのようなモチーフを作品で提示した小説家は他にはない」と指摘した。

また「井上陽水論」で知られる竹田氏は「その内心の『格率』だけの世界はいつか独我論的なものになり、どんな根拠にも支えられなくなる。人間の抱く生への欲望がいまの高度消費社会、システム社会の現実の中でどんな道筋をたどるのか明らかにし、そこから社会をよくしていく原理をひきだしていくことが大切ではないか」と強調。竹田、加藤両氏ともポストモダン（脱近代）の都市社会において変容せざるを得ない人間の魂を考える上で村上文学を評価した。

これに対し社会学者の橋爪氏は「（村上作品は）臆面もないナルシシストの世界を作品にし、読者によく読まれる意味で通俗性がある。しかし、そのナルシシズムが広く受け入れられる現象とは何なのか」と切りだした。

「彼の作品は切実感のなさから始まっている。しかし、切実さ＝現実とすると、現実性がないということで自分のアイデンティティを社会に承認される形で示しえない。本人も精神医療的な『癒し』として個人的に書いてきたようだ。傷つくことを恐れている今の若い人たちはそれを代償行為として読んでいるのではないか」と語り、さらに「ナルシシズムを表現する村上春樹は社会的な問題とは接点がなく、社会が徹底的にわからない人だ」と結論した。

東西対立の消滅やソ連の崩壊など世界政治システムの一極化の中で、個人はどのような原理を持ち、世界に対する「物語」を創っていけるのか。そんな問いかけがそれぞれに投げかけられた。